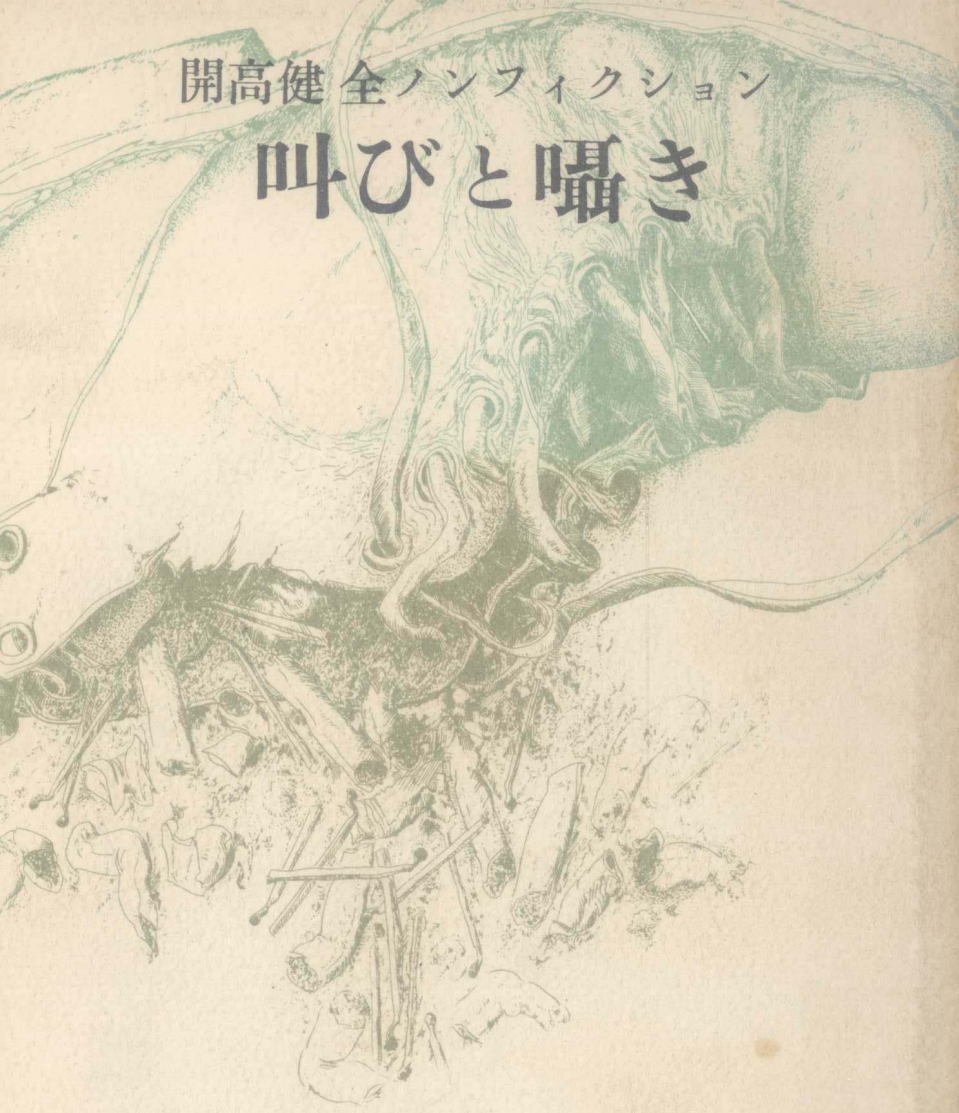
開高健全ノンフィクション

叫びと囁き



叫びと囁き

開高健全ノンフィクション

VOL II

文藝春秋版

叫びと囁き　開高健全ノンフィクション Ⅱ

2700円　　1977年2月15日　第1刷
1978年4月1日　第2刷

著　者　開高　健
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3
電話(265)1211(代)　振替東京7-78743番

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　中島製本株式会社

© Takeshi Kaiko 1977　printed in Japan

叫びと囁き・目次

I

過去と未来の国々

岩波新書版へのはしがき……九
中国　1960年5月30日～6月6日……一三
中国　1960年6月7日～6月15日……三五
中国　1960年6月16日～6月18日……五六
中国　1660年6月19日～7月6日……七三
ルーマニア　1960年9月……九三
チェコスロヴァキア　1960年10月……一一一
ポーランド　1960年11月……一三〇

II

声の狩人

一族再会……一五三
裁きは終りぬ……一七一
誇りと偏見……一九五
ソヴェトその日その日……二一一
ベルリン、東から西へ……二三三
声の狩人……二五九
核兵器　人間　文学（田中良）……二五六
サルトルとの四〇分……二六八
岩波新書版へのあとがき……二八三

III

ベトナム戦記

日ノ丸をいつもポケットに……二八九
ベトナムのカギ握る？　仏教徒……三〇九
ベトナム人の〝七つの顔〟……三三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

〝日本ベトナム人〟と高原人……三四〇
ベトコン少年、暁に死す……三五六
〝ベン・キャット砦〟の苦悩……三六四
姿なき狙撃者！ ジャングル戦……三八六
ベトナムは日本に期待する……四〇六
朝日新聞社版へのあとがき……四一五

Ⅳ

サイゴンの十字架

1968
サイゴンの裸者と死者……四一九
ジャングルの躍ける神……四三一
〝みんな最後に死ぬ〟……四六〇
十字架と三面記事……四七三
1973
蒸暑い死……四八五
影なき災禍……四九五
最後の撤兵……五〇二
聖者来たりなば……五〇八
ブーゲンヴィリアの木の下に……五一六
サイゴン・一つの時代が終った……五二四
荒野の青い道……五三五
十字架の影射すところ……五四八
不安な休憩……五六〇

Ⅴ

獣のしるし……五七一
砂漠に生まれた理想主義……五八四
革命はセーヌに流れた……五九五
ソルボンヌの壁新聞……六〇八

〝革命〟を夢みる学生諸君へ……六二〇
ナイジェリア　―この濡れた戦争……六二三
イスラエル　―この乾いた戦争……六二一
救　う……六六八
遠望する……六七二
弔　う……六七九

●頁の背後……六八七

叫びと囁き

装画／ギュンター・グラス

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

過去と未来の国々

岩波新書版へのはしがき

雑誌『世界』に連載したものをまとめたものである。一冊にするにあたっていくらか削った個所があるけれど、それはこの判の本の枚数のための工夫で、他意はない。外国から送った原稿もあり、帰国してから書いた原稿もあり、それも、手帖やタバコの空箱や、ちり紙、劇場のプログラムのはしなどに走り書きしたものをもとにしていることが多いので、いま読みかえしてみると、重複、矛盾、速断、誤解、情緒過多などと感ずることがたくさんあるように思うが、あえてなおさずにおいた。

中国へいったのは「文学代表団」の一人としてであったけれど、時期が時期なので文学らしい文学の話はほとんどせず、たくさんの文学者に会いはしたが日程は政治に終始した。文章家すなわち経世家という観念は中国の古代からの伝統で、「社会主義リアリズム」の要求の基礎もまた一つにはそこにあると思える。ただ、当時、私は文学の話をする時間のないことにつよい不満を抱いていた。疲れたり、倦んだりもした。そう感じたときは、そのように書いた。しかし、同時に私はまたたいへんな特権の機会にもめぐまれたのである。ほかの時期にいったのではとてもかいま見られないような中国の表情というものを眺めることができたし、毛沢東をはじめとする指導者たちの意見に親しく接することもできたのである。この紀行文のなかには毛沢東と陳毅の談話をのせておいた。注意深く読んでいただいたら彼らの対外、対内のいろいろな問題についての微妙な姿勢が見られるのではないかと思う。また、安保闘争当時の日本と日本人を外から眺めた場合の印象ということもある。もう一度ふりかえっていただく材料になれたらと思う。中国をふくめて諸外国の、この運動に対する表情を誰かが記録しておかなければならないと思って『人民日報』や『新華社通信』の外電リフレットを毎日チェックすることにかかった。それも、いわゆる「東」側の体制の諸国ばかりでなく、

「西」側の諸国のも手に入れようと努めた。けっして茅台酒ばかり飲んでいたわけではないのである。

東欧諸国は中国を見た眼ですぐいったので、私はそこにある「安定」の表情を、つい、「沈滞」とうけとってしまう誤ちをおかした。その感想をしばしば書いた。安定と沈滞は見る人によってどちらにでもとれる、きわめて弁別のむつかしい表情だが、それにしても私の書きかたはすこし断定的すぎたように感じている。もし中国を見ていないでこれらの国を眺めたらどうなっただろうかと、思わないではないのである。けれど、つぎのことだけはいえるのではないかと思う。これら諸国における物質面での社会主義の成功は、過去のそれらの国々の悲惨さと対照すればどんな反共主義者でも認めざるを得ないのである。そこで反共主義者は躍起になって、自由がない、ということにとびつく。西側にどんな自由があるか、その自由はどんな質のものか、ということについての精密な反省より、その誹謗の声はより性急であり、より辛辣である。たしかに自由は少ない。チェコに見る例はその物質面での成功の高さにくらべると不可解といっていいほどである。たしかに、自由は、まだ、少ない。しかし、この世界を流動するものとしてとらえるか、不動の秩序のうちにおいてだけでしかとらえようとしないか、その二つの姿勢のうちどちらをとるかで、この問題はまた変る。文学についていえば後者の姿勢は自然主義のなかに読むことができるのではないか。そしてそれのもたらした毒を私たちは知りすぎるほど知っているのではないか。文学ばかりか、生活の思想においても、また……

自由はおなじ社会主義体制のなかでも東欧諸国ではまったくさまざまな表情においておこなわれつつある。チェコでは暗黙のうちの禁書同然になっているある種の文学書が夜汽車でわずかに一晩の距離のポーランドでは氾濫しているといってよいほどよく読まれている。ルーマニアにはルーマニアの表情がある。中国にはまた中国独自の背景とそれが生みだした表情がある。社会主義もまた伝統や歴史や民族感情の規制をうける多様な文明なのである。

スターリンの暗影からの解放は各国において緩急さまざまである。しかし、それは、とにかく急速にうごきつつあり、ひらきつつある。東欧諸国は過去の悲惨な分裂と被圧迫からぬけだして、ようやく綜合と展開にのりだ

し、若い実験を開始した。彼らはアジア、アフリカの諸国が新しいという意味では新しくないが、やはり、若いのである。そうなったばかりなのである。私がかいま見た表情は一九六〇年の数カ月であるが、数年後にどんな表情があらわれるかは誰にも想像できない。中国についても同様である。だから、この紀行文はあくまでも一人の、不用意な、知識不充分の、小説家の、暫定的な現実についてのスケッチにすぎないのである。その気持からこの本の表題もきめた。

さて、これらの旅行の最終的なつぶやきは、私にとっても、また、一つである。

「ところで、日本は？……」

一九六一年三月

中国　1960年5月30日〜6月6日

5月30日

二三時五四分発のインド航空。

5月31日

香港の九竜飛行場についた。

通関をすませてからバスで駅に向かった。駅からは汽車で国境の深圳まで一時間ほどかかるのである。羽田から香港までが約八時間だから、九時間そこそこで中国へ入れることになる。ジェット機が東京―北京間を飛ぶとなると三時間ほどで行けるそうだから、まったく地球は小さくなった。この空路が早くひらかれるといい。

正午ちかくに国境についた。だいたい「国境」と聞けば、ハリウッドの住人にかぎらず人はロマンティシズムをかきたてられて、なにがしかの物語なりイメージなりをでっちあげる習慣を持っている。おまけにそれが島国の住人であってみれば、地上にひかれた一本の気まぐれな線のために血みどろの抗争が起るというのがどういうことなのか皮膚にピンとわからないものだから、いよいよ興味が起ってきた。で、私は汽車からおりてはげしい南国の日光のなかへ歩きだしながら、なんとなく

（……さて、さて！）

眼を皿のようにした。

汽車はゆるやかな丘陵地帯に入って小さな駅にとまる。六月の日光が静かにそそぎ、小さな川が流れている。その小川が、つまり、国境である。川のこちら岸に小屋があってイギリス人の士官が腰にモーゼル拳銃をぶらさげて旅券認証のためにタイプライターをたたいている。川には鉄橋がかかり、鉄橋の線路のあいだには板が敷いてあって、そこを一列縦隊になってわたってゆくのである。中国側の岸には解放軍の士官がだぶだぶの青ズボンにカーキ色の軍服、鉢のひらいた軍帽、そこへ肩からピカピ

カに磨きあげたマシン・ガンをさげてたっている。鉄橋のしたの川は澄んで速く流れ、藻がゆらめき、陽はかがやいて、茂みはカンナの花の香りがする。靴のしたで板がコトコトと音をたて、解放軍の士官が微笑してパスポートを眺め、

「ニイ・ハオ！（こんにちは）……」

つつましやかに握手をもとめた。

それだけだ。これで私は「国境を越えた」ことになるわけだ。禁じられたのは写真をとることだけである。なんだかもの足りないけれど、こんなところはもの足りないにこしたことはない。モーゼル拳銃やマシン・ガンは見ただけで心臓が冷える。

鉄橋をわたったところで三人の人が待っていた。握手をし、挨拶をすませ、食事をしてから汽車にのることになった。広州（広東）へいくのである。汽車は最後尾の箱で、「瞭望車」といって展望車のことである。革張りの安楽椅子が窓ぎわにずらりとならび、小卓が一つずつついていて、植木鉢がおいてある。お下げの少女がスラックスをはき、三〇分ごとに魔法瓶に湯を入れてめいめいの小型ジョッキほどの茶碗についでまわってくれる。（二等でも三等でもお茶がでる。寝台車でもおなじである。お茶の葉は二銭ほどだして小さな紙袋に入ったのを買うと、お湯代がそのなかに入っていて、いくらでもついでいってくれるのである。旅行する人のなかにはリュック・サックやショルダー・バグなどに紐で茶碗をくくりつけている人もいた。中国人のお茶好きは日本人以上である。生水がのめないから真夏で汗を流しながらも舌の焼けるようなお茶を吹いて飲んでいる。なお、植木鉢は三等車でも寝台車でも、講演会の演壇といわず博物館の応接室といわず、いたるところに見られた。）

三人のうち二人は通訳で一人は作家である。二人の通訳のうちの一人は女性で、陳蕙娟さんといい、東京の恵泉女学院卒業で終戦後二年に中国へ帰るまでずっと日本で育ったということであるから日本語は達者である。野上弥生子さんの『私の中国旅行』にも登場する。もう一人の通訳は男で、これまた日本語がおそろしく流暢で、とりわけ大阪弁で、

「えらい疲れはったでしょう」

と聞かれたのにはいささか肝をつぶした。わけを聞いてみると、戦時中、大阪の十三の労働者街に住んでいた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co